

仇浩七部集

阿蘇野

六





荒野集卷之六

雜

年中行夏内十二句

供屠蘇白散

荷今

いふはなやとそあはれの人比身

春日祭

とくもくもくはのなははははは

石清水臨時祭

背脊もきつゝかたむすひぬ

灌佛

まよふれ日やいへばあ佛蓮

端午

おも禮つゝ夢付は髪友(好)

施米

うちめておと次米そ虫臭そ

乞巧費

つゝの葉とくち七夕草とさだめ

駒迎

爪板友も縁のすゝめをひら

撰出

まよの地や豆のお舟をひら

十月更衣

ましとま衣とくちやうるむ

五篇

舞姫に來ては指を打つる

追難

木を縛りて腸をくつり思ひ面

詩題十六句

野水

今日不知誰計會

春風春水一時來

氷をくつり流る流るはまきの風

白片落梅浮涧水

あるあるくくは梅白く

春來無伴閑遊少

花賣ふもあつたのあつ隣り

花下忘帰因美景

突入なはもの川をせむの下

留春春不留春歸人

寂寞

いまもくくはの野もれ

巖風吹杖衣

不寒復不熱

徐脫を松う樹すくゆくはる

池晚蓮芳謝

蓮のまもりゆめをさるるまをさる

暑月貧家何処有客

來唯贈北窓風

涼をとりてかぬさるるり水のあそ

大庭四時心惣苦就中断腸是秋天

空の縁をゆりてはるる 秋の空

夜來風雨後秋気飒然新

秋のあそゆりてはるるあそゆり

鐘の鐘漏初夜長

取々星河欲曙天

取々星河欲曙天

殘照燈帛繡斜光月穿牖

物りもやほつても白くよおの月

万物秋霜能懷色

白くもやまふたつてを秋の暮

十月江南天气好

可憐冬景似春美

こかししめさく息つく少き夜

寂寞深村夜残雪雪中

静かき山とこねむや雪のうら

白頭夜礼佛名經

佛名の礼之腰懐く白髪引

福向能懐ひのうらほしむ

さきさきおろく

鋸鐮目立

舟泉

かきほひの夕月より

付木突

五月園の鶉を人の家

鉤瓶縄打

かへるはやほのこころとふたの里

糊賣

あさきあけびのきこねおとむらひ

馬糞橙

こがししの松やうきふらうき

李夫人

越人

魂在何許香煙引到焚處

かけぬきの抱はるもつらゆふ

楊貴妃

雲鬢半偏新睡覺花

冠不整下堂

ちる風と草由るもあまの

昭陽人

小頭鞋履窄衣裳青黛

點眉々細長外人不見々應笑

そのあまのやまののまのた
な

西施

官中拾得娥眉芥不獻吾

君是愛君

总たのうらぐれく牡丹の那

王照君

王貌風沙勝畫圖

このまよひまきぬの柳分

一目留主をすくもの侍

卯

釣雪

寂也の故也は佛供繞火く

辰

杜そそん誇書結束るはが

己

釋乃腹

午

乃腹

未

乃腹

申

五月

乃腹

乃腹

乃腹

乃腹

乃腹

乃腹

乃腹

乃腹

海魚

おぬしを鋸引きと盆の月 全

川魚

杖の昏替川くの火ぬきと 合帖

牛馬買是謂天落馬首穿牛

鼻是謂人

一方を柄はく樵姑継木と部 越人

藏舟於壑藏凶於澤謂之

固然而夜半有々力者負

之而走

かゝるく原走の市にらるこい

絶聖棄知大盜乃止

セタをわつすことなまむか

鋭者久

そぬくく流るるものむをゆか 桂夕

曠野集卷之七

名所

さきさきすみ奥のこ見の心竜回	杜園
——奥の骨や或る大江山	荷今
かゝ橋乃松も世の心臓	芭蕉
昔東一把うさく切えらば波も	湍水
嵯峨はくちをさるる西のぬち盛	荷今

琵琶橋眺望

中々残る鬼獄さむまゆらふものな
合昭

実たるくまのまじりて
宗祇
法師

美濃國岡崎のふしの心は

あまのこころを
あまのこころ

等野あまの布子賣た更衣
杜國

麦うつやゆめあまの志願の
重五

五月雨くかたぬめのや東國橋
芭蕉

湖乃の渾よりきま五日月雨
去來

牛もほしきおのあつりおの月雨
一髪

角回川

いこのは神楽の歌合ひく
貞室

みづのうらいく秋と月との音
破笠

いさむとほこしかなの歌
芭蕉

夕月也杖とみなる角回川
越人

九月十三日

角回川富士あまの月の
素堂

楊柳里を睡りて過りたり 夕帆
 日の入や舟をえりて樵の也 一髪
 のとたりや漆の産みせさうな 荷兮
 出の川脱く後とたひぬ衣を 芭蕉

ある人の後別

ちや〜〜〜 除凡
 疾い〜ぬ〜食糧のゆるゆる 冬松
 散ち〜〜〜 昌碧

五月雨や桂月をおす市松家 松芳
 夕らにとの天名う一志ほあり 傘下

芭蕉ちよ

稲妻あに〜〜 釣雪
 なさ〜〜 一井
 あま風〜〜 野水
 おい〜〜 舟泉
 空方ち〜〜 嵐彈

はらしなむしんていひん

又級乃月ちこ二人さるる秋乃り 荷今

越人旅さるるがしやてあつて

月入り脇をんつぎく馬乃らへ 野水

たぐり河川たよりつぎを木曾路 芭蕉

険乃昌多は是も教り秋のり 路通

物形桶とらお其角はく

ねくねく

将形桶に麻をかつきく秋の山 荷今

いほりく 稲きとあし 京 ちひ

入月こく志はくしごやわ 去寮

解をひく 観あくお徳う那 一井

保川まきく人

澤菴乃墓まりの秋の雪 文麟

草枕たむきくはくしりあるの夢 芭蕉

藻あゆぬ刀さくさく也村く 常秀

伴馬

高野まき

あまのたまきあまのり奥の院 杜園

あまのりあまのり食は 梅吉

高野まき

あまのたまきあまのり 雑子の芭蕉

あまのたまきあまのり 荷号

あまのりあまのり一盤 同

あまのりあまのり 杏雨

あまのりあまのり 秋風

あまのりあまのり 亀洞

九月十日まきあまのり

あまのりあまのり 嵐雪

あまのりあまのり 暁語

あまのりあまのり

あまのりあまのり 芭蕉

あまのりあまのり

二かゝりの縁のあはれもいふゆゑに 杜國

鐘倉建長寺よまゝて

あはれもいふゆゑに 越人

あはれ人の心をいふなり

あはれあはれなり

あはれ神をいふ縁のあはれ 荷今

あはれの心なり

あはれちの腹浦や次人鐘のあはれ 氣弾

穉の火より 去來

目や遠く 西武

物もとも 芭蕉

はあゝの 除風

老いせまき

い年や 越人

志

伊勢

車のか 一有妻

まぬくや余のよこも時ち
 除風
 蚊をかくるのちまこもあふ那
 長虹
 むし乃月くそれぬこら
 丈圃
 虫下は小種こつこも女う那
 冬文
 さくじゆ妹う垣ゆらう甚なり
 心棘

六宮粉代黛奥顔色

手月周の穉妻あゆめ七月の旅
 長虹
 一多くこ人侍のあゆをこりう那
 尚白

まひーまおよ

しまのよあさやう神一一女あも
 尚今
 まるあつこつあまあま
 小春
 妻のまみあつこつあまあま
 越人
 松の伴時争後のかかり
 俊似
 おおもし火燈を照こいあむ
 舟泉
 ううねくち燈ほこつあま
 嵐篋
 山廻りものうらや華う引
 松芳

三つぬく〜ふもあはるる〜しるぬり 冬松
わらら〜やいぬくの山御歌と 冒碧

奥常

末期く

あふる心ふとあふる山御歌と 守武

廿年一巡

あふる心ふとあふる山御歌と 北島水傘下

末期く

あふる心ふとあふる山御歌と 七順

松坂の山御歌とあふる心ふと

あふる心ふとあふる山御歌と

あふる心ふとあふる山御歌と 荷今

あふる心ふとあふる山御歌と

あふる心ふとあふる山御歌と 京 去來

あふる心ふとあふる山御歌と

あふる心ふとあふる山御歌と 荷今

世よむらへく妻の女はりのり

水ぎ月の相のくまやうらへし 野水

辞世

あも神や灯籠一川に主こそ舟

子へささく地かゝるは

何の親のあゝをくくし一躍り 落梧

一原野かゝ

あゝくまのせ小町かひのたのめ 釣雪

妻の遊善なり

あゝなへしきくの里人うたゝのむ 自悦

季を下り妻乃とまかりしを

いぬ

経る神すやかへひえゆく小島 去來

こそやみちりし後

その人さし断るくぬし秋の神 其角

あゝたゝ地をる子たゝまは

松風子や留り合々ふ秋の香 尚白

ある人の遠き

埋火をさゆやたみこの意は 芭蕉

旅よてみまかりまゝ

あゝ宵の光さうもくらしの光り 嵐弾

るよの野くさやまの伴の多岐 如加目 小春

曠野集卷之八

釋教

伊勢まゝ

神垣也 ねあはれはうらむに 涅槃像 芭蕉

負うるまゝおねはれ せりねんを 嵐弾

西行上人五百歳まゝ

まのまのまの ねのねの 梅の風 荷守

ねのねの 遠きまゝ

女めらりよ

薩佛乃りりくもゆきまふ麻のよゆ 芭蕉
薩佛のそ出流し—きりかき— 尚白

きりかき

腰のあゆき礼参をりきり山ゆ 一雪
糸くまて蒼つ日の清みり 加賀 一笑

十如是

松あゆき—あゆき—通る— 荷兮

昂身昂佛

復隈乃りきり扶とちんの佛ゆ 愚益
ほろひや俵の縁たると衣 崩彈
ねろろや—のり—あゆき—施餓鬼棚 荷兮
おろきおちばと—のり—のり— 探丸
石籠と路傍鬼の棚の—つぎや 文里
規糸舟と—筒を—も向きり 亀洞
たきあつと送ふ—あゆき—あゆき—ト枝

11

11

松乃陰 釣雪

平ホ施一切

松待こもく 仍人 衣そく 免なり 後似

綿書あけり 大佛 ねる ぬれ 中 市 荷兮

恒越く 引 返す 敵く とも せ 少 卜 枝

あつ人四時の景柳なりとて水鏡也

燕とて不食不園をいを感し

系とるるやとて

乃くそぬら 併く なるく 八ぬる 荷兮

あつちの 舟のく

燕と 清まり 乃 鼓く 入りて 其角

進く ぬく 垣 全 朽く 月 舟 一 井

秋の子く 本 錦 みる け 作 枝 卜 枝

人のむねにあつてはしむるや

あつちの舟のく

衣 着く みる 舟 一 時 雨 嵐 弾

鎌倉の 西園 論 寺 あり

たつと 舟の 清や 直く 氷る 人 越 人

古寺の雪

雪や伽藍の雪見也ひ 荷今

同

雪ややうと一玉より片腕 俊似

つらつら雪くこいされもき 雪仁 一井

知らずする人のこいしや 和舟鼓 文洵

千觀り馬もかせりし 子のゆ 其角

薬玉品七句

如寒者得火

中川白くむき雪の候より 胡及

如裸者得衣

雪乃日也 何様指ふあまみ家

如商人得主

双六乃あひてふいふむつら

如子得母

竹もくをけく死つてさげぬ

如後得船

月影比隣の夜本さかやうなり

如病得醫

かしくよきしはるるくはふらふら

如暗得燈

秋のよむねむしゆきふらふらに記さ

神紙

古きや否きふらふら獅子頭

釣雪

二月廿五月廿五細く

おとこもや廿四日の月影梅

荷今

きんくと梅もぬらうらな火分

同

さうともあひてこく神の梅

亀洞

上下のさうらぬやうく神の梅

昌碧

灯のかすしのなかりきり梅の中

釣雪

何れやうたのやうききし梅の心 越人

是くもくあふ梅もさうさの梅 舟泉

月代もききもや梅の心 雨桐

門あつて梅も瑞籬たみり 重五

繪馬も心人の後ささめり 玄察

若くもきき歯車かきこも 鈍可

宮乃後川後もささめり 李桃

此も後の本も心の中の梅も 好葉

ほろもきき花の中もささめり 玄察

まももきき花をわらもささめり 亀洞

破扇つてささめり 未学

川奈もささめり 荷今

こかりしや星も子も 尚白

此月もささめり 松芳

あつて梅も心の中も 落格

若宮奉納

ま〜ま〜地も妙也神々不
跡の方也寂もやうすの跡不
龍麻川若明の縁も神不
かつ〜この神もふ〜庭火か
橋杭や内枝も煤も〜ひ
肩付ら〜く〜なり地も〜
冬文

祝

荷字々四十乃ま〜

尖善も竹も修〜こゆも
君う代也〜く〜玉つ〜
青苔も何處も〜神印の石
〜〜〜海も〜木海の人
〜代の秋に〜ひ〜
〜〜〜か〜神〜人〜
先程へ梅も〜の〜
芭蕉



